

提言

イノベーション滋賀

平成28年3月22日

滋賀経済同友会

B I D 戦略研究会

[BID : BIO INSPIRED DESIGN]

目次

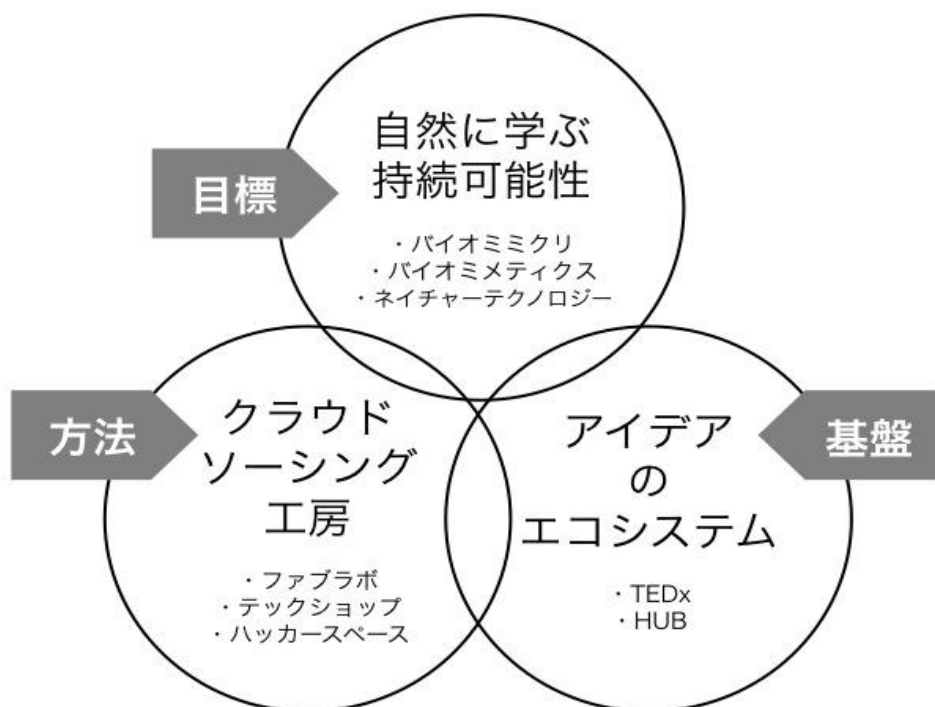
「**BID** 戦略」研究会の経過 2

研究会報告 4

提言 「イノベーション滋賀」 6

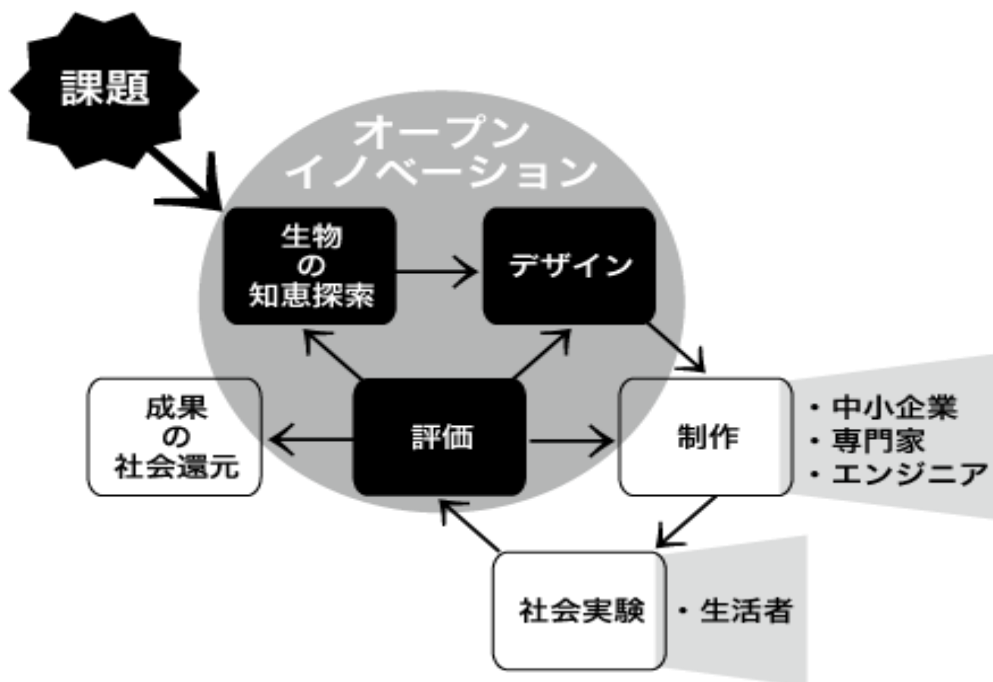
持続可能な社会へのアプローチ

- ・ 2008 年 「企業と生物多様性」研究会
生物多様性の豊かな社会を未来に引き継ぐための、滋賀県経済人の宣言として「琵琶湖いきものイニシアティブ」の発表をした。
- ・ 2011 年 「自然に学ぶ経済」研究会
生きものの社会性や知恵を学び、自然と共生する持続可能な循環型社会を作るために、ものづくり、経営判断、組織やシステムの仕組みなど、経済のあらゆる点において「自然に学ぶこと」を宣言した。
- ・ 2013 年 「新ものづくり」研究会
デジタルツールのインフラとこれまでの研究成果を活かしながら、自然に学ぶ新製品開発、社会貢献と経済活動を両立させるソーシャル・ベンチャーについて研究を行ない、新ものづくり拠点の構築を目指すべく、産学間のネットワークを強化した。



・ 2014年 「BMI(生き物に学ぶ革新的ものづくり)」研究会

革新的なものづくりに向けて共に知識を深め、また他団体と交流する場を持つことにより、クローズではなくオープンに各々の知恵や技術を結集し、持続可能な新しい価値を見いだす“ものづくり拠点”の検討を進めた。



さらに今年度は、各分野の方々と接点を持ち、「議論を交わし尊重し話し合える場」＝「プラットフォーム」の創成を意識して取り組んできた。

【第1回研究会】

日 時：2015年6月26日(金) 15:00-17:00

場 所：コラボ滋賀21（滋賀県大津市）

参加人数：20名

講 師：佐藤正弘氏（内閣府経済社会総合研究所研究官）

内 容：「持続可能な社会に向けた対話による新たなカバナンス」をテーマに講演いただいた。国際社会、国、地方の全てのレベルにおいて、広く社会層の参加を促すためのメカニズム「マルチステークホルダー・プロセス」について、事例を交えてお話いただいた。その後、滋賀県立大学名誉教授、アスクネイチャー・ジャパン理事長の仁連孝昭氏より、昨年度の「BMI(生き物に学ぶ革新的ものづくり)」研究会の取り組みや成果について報告を行い、今後の方針などを討議した。

【第2回研究会】

日 時：2015年9月15日(火) 15:00-17:00

場 所：日牟禮ヴィレッジ クラブハリエ（滋賀県近江八幡市）

参加人数：41名

講 師：中村太郎氏（中央大学理工学部教授）

内 容：「生物・生体を規範とした革新的ロボットの開発と社会実装への挑戦」をテーマに講演いただいた。ミミズ、アメンボ、カタツムリなどの生物の動きをモデルにロボットを開発し、宇宙、医療、資源探査などへ応用する事例を紹介いただいた。この他、人工筋肉や機能性流体の開発を通じて、“柔らかい”ロボットを実現し、福祉や医療の現場での応用事例もお話いただいた。これは、従来の手法や人力では到底実現しえない極限作業ロボットの開発として期待が高まっているものである。

【第3回研究会】

日 時：2016年1月21日(木) 15:00-17:00

場 所：コラボしが 21 (滋賀県大津市)

参加人数：29名

講 師：仁連孝昭氏 (アスクネイチャー・ジャパン理事長、滋賀県立大学名誉教授)

内 容：「Bio Inspired Design を我がものにするために」をテーマに、なぜ自然界のデザインが課題解決の方法に有効なのかを学んだ後、それを実践するためのオープンな場づくりの必要性を討議した。また、具体的な滋賀の課題に基づき、会社・社会・課題の3テーマでグループディスカッションを行った。

【第4回研究会】

日 時：2016年2月29日(月) 15:00-17:00

場 所：コラボしが 21 (滋賀県大津市)

参加人数：32名

講 師：藤井秀司氏 (大阪工業大学 工学部 准教授)

内 容：「<バイオミメティック材料の開発>微粒子が拓く省エネルギー型ものづくり」をテーマに講演をいただいた。はじめに微粒子や高分子について詳しく説明をしていただいたあと、アブラムシが自分で出した蜜の表面を細かい粒子で覆うことで、べたつきが原因となり利用範囲に制限がかかるなど扱いに課題があったが、べとつかない粘着物質の粒ができることを活用し、粉末状の粘着剤を開発された。

提言

消費社会の発展に支えられた経済成長はサプライサイドとデマンドサイドの両面から限界にぶち当たっている。資源問題、環境問題、エネルギー問題、格差社会、伝統的文化の形骸化と文化の多様性の喪失、人間性の破壊、金融バブルの暴走などにそれが表れている。現在は、20世紀の世界を牽引した経済成長モデルが通用しなくなり、それに代わる新しい社会モデルを模索している時代である。かといって、新しい社会モデルがはっきりした形にはなっていない。持続可能な社会が唱われるようになったが、その具体的な姿はまだ不分明である。

新しい社会モデルを見出し、それを共有し、その実現のために努力することが求められている。そのひとつのヒントになるものは、38億年かけて進化し発展してきた生命世界である。生命世界の持続性の秘密を学び、それを私たちの社会に応用することが改めて重要な課題となっている。

生命社会を形づくっている仕組み、それぞれの生命が獲得してきた知恵、それらを継承し進化させていく仕組みから、私たちは新しい社会のモデルを学びとり実践することが求められている。

生物が多様な生命間の情報と物質のやり取りを通じて、互いに共進化し、生態系のレジリエンスを獲得してきたように、場の課題、場のコンテキストを共有しながら、場に関わる多様なステイクホルダーが協働して、課題の創造的な解決にあたるのが重要である。とりわけ、私たちはこれまで経験したことのない人口減少局面に入り、地域社会は従来のままの経済や公共サービスで維持できなくなることは明らかであり、新しいモデルを実践的に創造することが求められている。狭い利害に囚われず、従来の垣根を越え、ひとつの場を共有する、創造的に社会の課題に正面から取り組むネットワーク型イノベーション（イノベーション滋賀）を提案する。

ネットワーク型イノベーションのイメージ

